

# 他力

— 住職便り —



第26号（令和三年五月）  
専徳寺住職 弘中満雄

## 【丁度良い】

隣町のとあるお店。会計の時、ふと見ると、後ろの壁に、何やら文字の書かれた板（左写真）が掛けてありました。



「これ、どうしたのですか？」  
「両親が山陽自動車道の小谷サービスエリアで買ったものです。」

そこにはこう書いてました（一部訂正）

## 丁度良い

良寛

お前はお前であらうぞよい！  
顔も体も名前も姓も お前に  
それは丁度よい！  
貧も富も親も子も 息子の  
嫁もその孫も、それはお前に丁度  
よい。幸も不幸も喜びも  
悲しみさえも丁度よい。  
歩いたお前の人生は悪くも  
なければ良くもない、  
お前にとて丁度よい。  
地獄いこうと極楽いこうと  
いたところが丁度よい。  
うぬぼれる要もなく卑下する  
要もなく上もなければ下もない  
死ぬ月日さえも丁度よい。  
お前はそれで丁度よい！



「分るような分らないような（笑）」

苦笑いの若い店主さん。

確かに、なぜ「丁度良い」のでしょうか？

## 【仏様のことば】

何度も出てくる“丁度良い”という言葉の響きが印象的なこの詩。

実は、良寛さん作と書いてありますが、本当は浄土真宗の坊守「藤場美津路」さんの詩です。そして実際のタイトルは「丁度良い」ではなく、「**仏様のことば**」。実は、最後の五行が抜けてます。

**仏様と二人連れの人生  
丁度よくないはずがない  
丁度よいと聞こえた時  
憶念の信が生まれます  
南無阿弥陀仏**

丁度良い理由が、はっきりとあらわれていません。

この詩はお念仏の喜び、阿弥陀様のお慈悲に出遇えた喜びの詩なのです。

## 【他力の信心】

コロナ禍の今だけでなく、これからもイライラしたり、愚痴がこぼれる私です。「こんなはずではなかった」と嘆いたり、「私の人生丁度良い」と開き直ったり。あせってあがいたり、反対にあきらめて居直ったり。それとは違う第三の道、仏様と二人連れの人生の道があります。「何の不足もありませんでした。」  
仏様の救いが聞こえた時、「他力の信心」が生まれます。

自ら信じて救われるのではなく、救われていた事を聞くばかりです。

（おわり）



※詩「仏様のことば」の全文の朗読です。